



# 宇宙科学入門

尾崎洋二著

1996年10月15日発行

定価 3708 円 (本体 3600 円)

東京大学出版会

教科書

お薦め度

☆☆☆☆★

著者は日本が世界に誇る理論天文学山脈の最高峰の一人である。その著者が宇宙とは何であるかについて、これから学問を開拓しようとする若者たちに書いた入門書である。

なぜ宇宙科学を学ぶか、どうやって宇宙を見るのかに始まって、まず太陽と太陽系を調べる。最新の太陽ニュートリノの謎とそれを解く有力な手がかりとしての日震学など著者とそのグループならではの講義で始まる。太陽系の形成、恒星の形成と進化、銀河の形成と進化は、天体物理学の中心的課題であり、その基礎的知識は最小の数式を用いて最深の奥行きを持った記述がなされている。さらに、恒星や銀河の進化を促進し、宇宙の進化の骨組みをなす活動的な星や暗黒物質についてのホットな議論があって宇宙論へ進む。最後に宇宙観の変遷を見て、人間存在の意義にもどる。天文学を30年も研究していると一種の人生観が出来る。尾崎洋二氏の人生観が本書に結実したといえる。教育的な著者の性格が反映して、宇宙観のなかに天文学と世界観とがよくバランスした希有の名著である。宇宙科学を志す学生、宇宙地球規模の教養を持ちたい若者は勿論であるが、宇宙科学関係の教育に従事する人にとってもまことに頼りになる教科書参考書である。

海野和太郎 (東大・天文学教室 OB)

本書は著者の東京大学教養学部2年生向け「天文学概論」講義を基に、教養としての「現在の宇宙科学」を広く一般の読者にも理解できるように解説したものである。その内容については海野氏の評にあるので省略するが、その充実していることと読み易さは特筆すべきだ。読み物としても十分におもしろく、一般アマチュアの方にも無理なく内容を理解してもらえらるう。また、天文学や宇宙物理学を専攻する学生やこれらの分野の研究者も、広く現在の天文学をまとめた読み物として読んでみるべきだと思う。天文学会の会員のみなさんにはぜひ読んでもらいたい一冊だ。

あまり誉めるべきことが多くてこまるが、あえて改良を望む点としては、その体裁と写真だ。ソフトカバーでコンパクトな本は良いが、どうも教科書的な感じを受けて一般受けしないのではないかと心配する。中身にはカラー写真が無く、せっかくのおもしろい写真が活かされていない。カラー写真が多いと高価になるからやむを得なかったのかも知れないが(すでにこの本の価格は高めだ、それだけの内容はあるのだが)もっと一般の興味をそそるような体裁にすれば、部数も出るのではないかと。また、より内容についての興味を引き立て、理解の一助になるのではないかと思うのだが。

関口和寛 (国立天文台)